

静寂の中、私の名前が呼ばれる。私はゆっくりと舞台へと進む。まばゆい光に包まれた瞬間、緊張で小さな心臓は今にも壊れそうになる。そんな私をいつも支えてくれるのは、舞台の中央に佇む一台のグランドピアノだ。完璧に調律されたその鍵盤は、確かな音を響かせてくれる信頼がある。ホールの音響も、繊細な一音まで余すことなくすくい取ってくれよう。そして、鍵盤に触れた瞬間、時間も重力も消え、ただ音楽だけが満ちる世界に包まれる感覚になる。私なりのゾーンに入ったと実感するそのとき、音を紡ぎながら、深く温かな感謝が胸の奥に広がっていく。

この「感謝」の対象には、先生や家族、仲間たちがいる。だが最近、そこにもう一つ加わった存在がある。それが「税金」だ。

幼少期からピアノと共に歩んできた私は、数多くの「税の恩恵」を受けてきた。コンサートホールの建設や維持、音響設備の整備、ピアノの管理。地域の芸術プログラムや学校教育も、税の支えがあってこそ成り立っている。私が当たり前のように音楽室でピアノを弾けたのも、その環境が税で整えられていたからだ。

今年、生まれ故郷の静岡県における心温まる取り組みを知った。県内の小中・特別支援学校八十校に、グランドピアノ四十台と電子ピアノ四十台が寄贈されたという。これは、教育支援財団と楽器メーカーの協働によるものだ。学校という「公共の場」が税に支えられているからこそ、こうした寄贈が意味を持つ。公的基盤の上に、地域や民間の善意が重なった美しい連携のかたちだ。子どもたちが「本物の音」に触れる機会が広がれば、感性や可能性の芽も育っていくだろう。

文化活動、とりわけ音楽や美術、舞台芸術は「ぜいたく」と見なされることもある。だが人はパンだけで生きているのではない。心を揺さぶるもの、感情を分かち合うもの、それが芸術の役割だ。災害や困難のなかで、人々の気持ちを結び直す力も、見えない心の傷を癒す力も、芸術にはある。

しかし、文化活動は経済的に不安定であり、民間の力だけでは支えきれない。だからこそ税の力が必要なのだ。助成金、公共施設の整備費、芸術祭への支援、それらは私たちの納めた税に依るところが大きい。そしてその恩恵は、芸術家だけでなく、少なくとも間接的にすべての市民が享受することができる。

税とは、ただ徴収されるものではない。誰かの挑戦を支え、夢を育む社会の共有財産である。税が私に与えてくれた恩恵は、音楽であり、ピアノであり、舞台であろう。

私はこれからも演奏を続けていく。音楽で誰かの心を動かすために。受けた恩を音で返していけるように。税に支えられた「音楽のある日常」に感謝しながら。